

一宮尾西歴史民俗資料館 特別展「のこぎり屋根と毛織物」参加報告

1. 一宮市のノコギリ屋根工場

一宮市のノコギリ屋根工場については、その存在は確認されていたが本格的な調査は行われていなかったため、実態は定かではなかった。桐生商工会議所が平成14年にシンポジウム「のこぎり屋根のあるまち桐生からの発信」を開催したときに全国の繊維産地に向けてアンケート調査を行ったが、その際に一宮地場産業ファッションデザインセンターから回答があり、①ノコギリ屋根工場の存在については「ある」②現存するものと消失したものの数は、いずれも「不明」③建設された目的は「紡績」「織物」「染色」④現在の使われ方は「当初のままのところもあるが、転廃業により違う目的で使われている」⑤その使われ方は「倉庫・ガレージ」「アトリエ・工房」一以上のような内容だった。

この時に蒲郡商工会議所からは50棟が現存し、300棟が消失しているという回答があり、さらにシンポジウムの基調講演を行った建築写真家・吉田敬子さんが蒲郡のノコギリ屋根工場の事例を挙げ、映像を交えて「100棟以上ある」と報告した。このことから愛知県内にはノコギリ屋根工場が多く残存している可能性が高いという印象は持っていた。

平成22年5月1日の中日新聞夕刊に「のこぎり屋根、一宮が7倍 桐生最多説を“切る”！」という見出しで、一宮市のノコギリ屋根工場が少なくとも1,539棟あることが市民有志の調査で分かった、と伝えた。この時、未調査の地域も多くあり総数は2,000棟以上になるとみられるとも付け加えられており、この時点で桐生は“日本一”の座を明け渡した。

その後、吉田敬子さんから一宮のノコギリ屋根工場についての情報が度々寄せられ、一宮は桐生のノコギリ屋根工場に携わるメンバーにとって、非常に興味のある街となっていた。



一宮市尾西歴史民俗資料館本館（左）と別館の起宿脇本陣跡、旧林家住宅

2. 一宮市尾西歴史民俗資料館特別展「のこぎり屋根と毛織物」

一宮市制90周年特別展として、一宮市尾西歴史民俗資料館が「のこぎり屋根と毛織物」と題し、初めての本格的な展示会をするという情報を吉田敬子さんの紹介で、同館学芸員の神田年浩さんからいただいた。開催チラシと図録が送られ、図録の内容からは学術的調査が進んでいることがうかがえた。

FT運営委員会やまちづくり委員会で開催情報を流したが、視察団を結成するまでには至らなかったため、佐々木正純まちづくり委員長と事務局・石原が3月24日（土）25日（日）の日程で展示会を含む一宮視察を行った。

行程については、佐々木委員長の乗用車で北関東道、関越道、圏央道、中央道、東名、名神の各高速道路を乗り継ぎ、約440kmの長丁場。午前6時過ぎに前橋市駒形町の佐々木委員長宅を出発、同11時30分過ぎに一宮に到着した。

一宮西ICで高速を降り、資料館に向かう道筋のあちこちにノコギリ屋根工場が散見され、その集積度は桐生をはるかに凌ぐものであった。

一宮市尾西歴史民俗資料館は同市の起（おこし）地区にあり、名古屋から京都へ向かう美濃路の木曾川沿いに位置する。起宿には木曾川を渡るかつての渡船場跡があり、川を渡ると岐阜県羽島市である。現在は濃尾大橋が両地区をつないでいる。美濃路は古道の面影を留め、細い道沿いに古民家やノコギリ屋根工場が時々現れる。資料館は蔵造りをイメージさせる建築物で、隣接する建物は脇本陣として使われた古民家であり、その庭園も含め資料館のスペースとなっている。

特別展は資料館の二階で開催されており、入口にはノコギリ屋根工場の大きなタイトル入りのパネル写真、展示室には「のこぎり屋根工場とは」から始まり、その歴史や形態、一宮（尾西地方）の工場の歴史、代表的な工場の歴史・概要、毛織物の製造工程、全国の町の鳥瞰図を描いた吉田初三郎の工場鳥瞰図、工場の復元模型など立体的、系統的に展示されていた。（図録参照）

3月24日（土）の午後1時30分からは同館2階研修室で吉田敬子さんの特別講演「ノコギリ屋根に魅せられて～全国のノコギリ屋根工場を撮影して」が開催された。聴講者は約50人、桐生をはじめとする全国のノコギリ屋根工場をスライドで紹介しながら、ノコギリ屋根工場の魅力と歴史的に重要な建物であることを語った。（資料参照）

講演終了後、尾張のこぎり屋根調査団の小野雅信氏（一級建築士）、岩井章真氏（一宮市役所建設管理課主事）、野口英一郎氏らを紹介され名刺交換を行った。彼らが調査団の中心メンバーであり、中部産業遺産研究会に属している。調査団は市民グループであり、ボランティアでの調査活動であるが、調査範囲は拡大しており、一宮市内だけでなく、周囲の都市の調査も取り組みつつあり、この都市のなかには桐生を上回る数のノコギリ屋根工場が残っているものも多く、概要説明を聞くだけでも桐生は5～6位のランクとなるような印象である。詳細な調査結果が待たれるところである。



特別展「のこぎり屋根と毛織物」会場（上）
と吉田敬子さんの記念講演（下）

小野氏は翌25日（日）午前中に市内を案内してくれるとのこと、コースは以前、野口三郎氏（桐生のノコギリ屋根工場研究の先駆者）を案内したものと同一順路を考えているとのことだった。

24日は資料館の神田学芸員に説明を受けて展示施設をじっくりと見学、午後5時頃に退出した。

3. ノコギリ屋根工場の広域連携

24日午後10時40分頃、日野茂会頭の逝去の知らせが長尾専務理事からあり、25日午前7時56分発の東海道本線、東海道新幹線、上越新幹線、両毛線を乗り継ぎ、急きょ帰桐する。

25日の一宮市内のノコギリ屋根工場巡りは佐々木正純まちづくり委員長が参加。（写真参照）

尾張のこぎり屋根調査団の調査により、一宮市とその周辺のノコギリ屋根工場の実態が明らかになりつつある。その集積度は桐生を含む両毛地区をはるかに凌ぐことは確実である。調査は産業考古学会のメンバーにより手掛けられ、調査報告書を見ても極めて専門的で学術的価値の高いものである。この基礎調査を基に、次にどう動いていくかが一宮の課題だろう。吉田さんの講演の時も行

政や商工会議所の姿が見えなかった。調査団に商工会議所が関わっているかどうかを聞いてみたが、ほとんど関わっていないとの返事だった。一宮に圧倒的に残るノコギリ屋根工場を地域の資源として多くの市民が認め、行政や産業界がからみ、これを保存継承していくようになるには、かなりの時間が必要と思われる。

起地区を通る美濃路はかつての街道の雰囲気の色濃く残し、景観に優れたエリアであるが、真新しい建物が多く建てられていることも現実である。吉田敬子さんは8年ほど前に初めて起を訪れたというが、多くの工場が解体され景観も変わってきているという。

ノコギリ屋根工場が存在する街が互いの情報を交換し、産業遺産としての価値を共有し、保存・活用・継承していけるようにするためには、広域連携、例えば「ノコギリ屋根サミット」のような会議あるいはシンポジウムを開催することも一つの方法である。それを主導するのはノコギリ屋根工場の先駆的活用例を多く抱える桐生の役割かもしれないということを、今回の視察から強く感じた。

(報告者：桐生商工会議所・石原雄二)



3月25日に視察した一宮市内のノコギリ屋根工場（佐々木正純委員長撮影）